

大学生研究フォーラム 2010/事例報告(報告書用)

学芸カフェテリアによる学修・キャリア支援

～実施4年目の現状報告・事業の推進～

東京学芸大学 学生キャリア支援センター特任准教授 番田清美

東京学芸大学の番田と申します。本日は、文科省 GP に採択された学芸カフェテリアによる学修・キャリア支援についてお話しさせていただきたいと思います。この取り組みは、2007年11月に採択されまして、2008年4月から本稼働しまして今年で4年目、GP最終年度を迎えます。前期が終わったところですので、前期までの取り組みの様子と後期に向けての戦略ですね。最終年度の戦略についてお話しさせていただきます。本学は東京学芸大学は教員養成に特化した大学です。教育学部の単科大学なんですね。ところが専攻というのが医学薬学部を除いて殆どすべての専攻を網羅しているというかなり教授陣も分厚く、幅の広い教授陣が集まっています。その知識や造形を学生のキャリア支援に活かさない手は無いという風に考えました、そこで私たち学芸カフェテリアスタッフが働きかけまして、先生方からメニューという形で講座をしていきます。その講座を学生たちに提供してもらうということで、内部資源によるキャリア教育を行おうというものです。もちろんこの時には専攻はとっばらっています。学生たちも全く違う学部の先生の授業を受けられます。

学芸カフェテリアには4つの柱があるのですが、今回は時間がありませんので講座について特化してお話しさせていただきます。2008年から始まっておりませんが、参加学生は次第に増えてきています。2008年の後期には実は大物有名人を呼んでしまいましたので参加人数がぐっと上がってしまったのですが、それを除きますと地道に増えています。そして、ちょっと注目して頂きたいのが、今年の前期なんですが、3年生はやはり自分が必要だと思うのでこういう講座に出てくるんですね。申し忘れましたが、これは授業外授業なんです。ですから単位にもならないものなんですね。学生たちが自主的に出てくる授業なんですね。3年生はもちろん出てくるのですが、今年変化があったのは1年生の伸びです。これは何故かという、先生方に認知して頂いたんです。こういった授業外授業というものを学内の先生方に認知して頂いて、学生たちに参加を呼びかけてもらえるようになった。そのために参加者数がアップしてまいりました。延べ人数なんですけど、いままで一回でもカフェテリアに参加したことがある学生が5500人中3443名。実質990人で全体の学生の二割と統計的には上がっていますが、その実体を見ますと殆どまあ一見さんですね。一見さんが多いんです。学芸カフェテリアの講座、やはりヘビーユーザー。何回も何回も来る学生は来るんですね。そういう学生に支えられているというか、そういう学生が利用しているということが顕著です。そしてこの講座数なんですが、一番最初の年は8名の一番理解を示していただいたコアな先生方によって立ちあげられました。ところがその先生方の紹介でどんどん新しい先生が増えてきました。

今年の講座数は、前期で 36 になりましたが、毎回新しい先生を獲得しています。今年の前期は 27 名の先生にほとんど内部資源で賄われております。このように内部資源。先生だけとは限りません。職員の方もいます。こういった内部資源の掘り起こしを行って、そしてやはり学生のニーズに聞いていきます。そうするとそのうち私たちも新たにこのようなことを付け加えていかなければいけないという提案も入れ込んでいきます、やはり授業というものはどんどん進化していくものなんですね。取り組みの変化は、まず 1 年前は私たちは先生方にボランティアで授業外でやっていただくわけですから、先生にやっていただくことをお願いするだけです。内部資源を掘り起こすことだけに凄く力を入れました。授業の質とかというものは問わなかったので、中味は座学中心になっていました。座学中心で 1 時間なり 1 時間半なりやって、最後に学生が感想文を書いて帰るという段階でした。

ところが 2 年目になるとちょっと欲が湧いてきて、もちろん先生方は座学なんですけど、そのあとに最後どういう感想を持ったかということシェアリングしようというシェアリングの時間を設けました。参加者同士が語り合うわけです。その後、今日こんなことを学んだということを書かせる、というような二次作業を入れていきました。

そして今年 3 年目ですね。やはり 3 年目ともなると、こう PDCA サイクルを何回も回しているわけですから、私たちも進化していきます。やはりよりインタラクティブな講座を構成しないといけないなという考えになっていって、先生方と打ち合わせの段階から色々とお話をしていきました。最後の段階で最後の 20 分くらいなんですけど、先生が一番学生に伝えたいことは何でしょうかと問いを立てて、その問いに従ってグループディスカッションをさせる。そして、その後今日学びを記入させる。そういうパターンを前期につくっていきました。

今日は 3 年目について、より深くご説明します。前期の講座の戦略ですが、とにかく先程言いましたようにまた新しい先生方を獲得することに力を入れた。それから内容の充実。つまり、キャリア支援メニューと学習支援メニューの 2 つに学芸カフェテリア講座というのはわかれているのですが、キャリア支援メニューというのは力養成シリーズというのに力を入れていきました。これはコンピテンシーを伸ばすわけです。知識というものをどうやって世の中で活かせる力に変えられるのかということとを体得させるようなそういう講座を設けました。もうひとつは学習支援メニュー。これは学内の先生に凄く活躍して頂いたのですが、人間の幅を広げるためのメニューです。それを豊富に設けました。それから先程申し上げました学生が発信できる学びの時間というのをしっかり最後 20 分間確保する。そういうことに力を入れました。それからもうひとつですね。私たち、カフェメイツという学生スタッフがいます。私たちは GP 予算で雇われている特任なんですけれども、零細企業なんですね。私ともう一人と事務補佐員しかいません。この零細企業の中で一番片腕になってくれているのがカフェメイツ、学生スタッフなんです。この学生スタッフを前期に養成しよう、ファシリテーターとして後期に使いたいと思いました。そこでファシリテーター養成講座。研修、学生をファシリテーターにしていく研修を入れました。次にその最後の 20 分についてもう少しお話させていただきます。学生が発信

できる学びの時間として、まず問うということですね。あなたはこの講座で何を学んだのかという、問いを考えたわけです。これは講座をやっていただく先生と私とファシリテーターがお話をしまして、こういうふうなガードレール、要するに趣向の枠というものを決めまして、問いを立てるわけですね。ほとんどの問いというのは行動変容を促すようなものです。この講座を受けたから明日はあなたはどんなことをしていきますか？というような問いが多かったです。そして、それによって学生たちは自分に結び付けて、これを得たから明日はこうして行こうと考えさせる、そういう時間を与えました。それからその次に、その考えたことをお互いにシェアするディスカッションの場ですね。これは自分の気づきを言語化して他者に発信するということです。しかも他者の視点を聞いて自分の価値観を拡張するという、そういう目的がありました。そして最後に今日の学びを記入させるわけですね。これには自分の理解というものを広げられたものを今度は自分の理解として落とし込む、記憶として落とし込むという作業。この3段階で考えて学びの時間というものを設けていきました。学生は実際に何を得たのだろうか。ここでありがたいことに溝上先生から質問用紙を頂きました。この前期の最初と最後に同じ質問用紙で、溝上先生の御研究の質問用紙でアセスメントを取らせていただきました。やはりこの学芸カフェテリアには、講座が大好きなヘビーユーザーがいるんですね。このヘビーユーザーの中から10人くらい抽出したのですが、その3人の例を話させていただきます。

このヘビーユーザー達というのは、やはり将来の見通しをしっかりと持っているんですね。そして何をすべきかわかってるし実行もしているという3人です。AくんBくんCさんと3人いるわけですが、Aくん、新課程と書いてあるのと教員養成課程というのとあるんですけども、教員養成課程というのは教員免許を取らなければいけない、そういう過程があるんですね。それともう一つ、学芸大学には新課程といって教員免許を取らなくてもいい課程があるんです。でもほとんどの学生はそう言われながらも教職免許をとるんですね。

まずAくんからですね。Aくんは大学生生活やや不満足です。2年生になったばかり、4月の時点ですね。これ溝上先生のグレーの部分は先生が研究されたタイプ3。よく学び良く遊ぶ、その平均です。その平均と比べてみても、この赤の部分は授業なんですけど、この黄色い部分、要するに自律的な学習の部分。この時間も高いんですね。それからコミュニケーション。社会活動、青。この時間も高いと。しかしストイックなのか、個人的な時間が少ないですね。PC やったりする時間が少ない。

これ4月と7月と取っているのですが、全然この時間的にはあまり変わってないですね。彼は何故やや大学生生活が不満なのかというと、とても横柄なこと言うんですね。1年の時は座学が多いうんです。座学というのは自分で本を読めばわかる。だから本を読めばわかるようなことを座学で受けても意味がないというんですよ。大学なんだからもっと座学じゃなくてインタラクティブな授業をやって、普段自分だけじゃ分からないことをやってくれるのが授業だなんていうことを言うんですね。そんなこと言っていたのですが、あまり時間的にはこの最初と最後の内容は変わらないです。この学びの内容を見てみると、実は凄く大きな変化があったわけです。4月の時点で、これも溝上先生の質問用紙から取らせていただいたのですが、赤い部分というのが授業で付いた分。ピンクの部分

が授業外で付いた部分、黒のところはアカデミックな知識がどれだけついたかという自己評価ですね。このピンクの方はもうそれに関連して社会的なスキル、それを運用するスキルがどれくらいついたかという自己評価、体得感ですよ。それを見るとピンクですね。ほとんど自分でつけたということです。最高点が4なんですけど、授業ではついてないよ、自分でつけたんだよと横柄なことというわけなんです。ところが、学芸カフェテリアの授業を受けて、後期。前期の終わりに本人は全然無意識なんですけど変化している。何故変化したのかを聞いてみたところ、「実は二年生になって、演習を取るようになった。そうすると自分は授業を甘く見ていたなということを感じてきた」と。授業でも力がつくことはつくんだと。そして授業に出たアカデミックなことをもっと知ることによって今までの自分は横柄だった、まだまだついていない力は沢山あるな、ということを実感したわけです。

次ですね。B くんです。B くんは教員養成。大学生活に大満足で、教員になるんだと決めてる学生です。学芸カフェテリアに出てくるのは、教員というのは、ストイックで狭い人間になってしまうから、そうじゃなくて学芸カフェテリアで自分の色々なところを知りたい、だから来るんです、と。そういう目的意識をはっきり持っている学生です。この学生も前期の最初と最後では、時間にちょっと自主的に勉強する意識が下がっている傾向はありますが、あまり差がないんですね。この学生も4月の段階で自分で感じる体得感はこちらのようですが、前期の最後になりますと底上げされています。全体的に底が上がってきている、そして授業でも授業外でもどちらでもいいから何らかのかたちで自分の力を、コンピテンシーを上げていこう。自分のアカデミックな力を付けていこうというのがみられてくると思います。

最後。C さんですね。彼女は4年生ですね。4月の段階ではバリバリに教育のプロフェッショナルになりたいと言っていた学生です。彼女の目標というのははっきり決まってるんですね。彼女はこういいますね、「日本という国には資源がない、少子化になっていて、お金がない。だから何に一番投資すべきかといったらそれは人を人的に育てることだ。でもいま社会環境はそうじゃない。だから私がどげんかせんといかん」と、言うんです(笑)。自分はそういう仕事に就きたいというんです。それで、4月の段階でそういうことを言っていたんですが、悩んでました。将来に対してどこにいったらいいのか。それで、この6月に飛躍的にこの自分の勉強の時間がどんと増えていくわけですね。公務員試験目前の時に、一気に加速度が入って勉強してるわけです。自分がやりたいことに向かって。もうひとつは、ボランティア教室の時間とかティーチングアシスタントの時間も伸びています。普通なら余裕がないはずなのに、ここも伸びてる。どうしてかと聞くと、「私はそういう意識を持って社会をどうにかしたい、そういう仕事に就きたいと思ってやってるのだから、自分のテストだからといってそういう活動をおろそかにできません。わたし一生懸命やります」と。素晴らしい。その直後、物凄く難関な公務員試験に合格して、社会をどげんかしていく方になります。ですからやはりその自分の目標というものをしっかり持っている人、そしてそれを貪欲に考えて学芸カフェテリアで何かを得ようとしている人というのは違うんだなということに気づきました。後もう一つは、彼女は自己評価が物凄く低いんですね。先程の彼は全部自分の力だとバーっと色付けしてましたが、彼女は凄く超難関の

ところに受かるような学生なのに自己評価が凄く低い。やはりこれは自分に厳しいんですね。自分の伸びしろがまだまだだと感じて、社会を厳しく感じていることの表れだと思います。これが4月ですね。その後6月、何が起きているかという、彼女の中で統合が起きているんですね。自分の学びというのは授業でも授業外であろうと関係ないと。自分の学びというのはどこであろうと全て自分の血となり肉となる、全て融合されるんだという結論に彼女の中で至ってるんです。これ、評価は低いですが彼女の意識はとても高いですね。溝上先生の尺度をお借りしたおかげでこういうことが分かってまいりました。

それではですね、彼らが講座で何を得ているのかということをもとめてみました。まずこの学芸カフェテリア講座にどうして来るのかと聴きますと、実践力を発揮する時に備えることができるんだと。備えているといざというときに。それから様々な人の価値観を知ることで自分の価値観や立場を知って視野を広げることができる。そのために来ています。そして、講師や参加者によって自分が刺激される、奮いたたされる。自己啓発ですよ。刺激を求めてきているんです。それからもうひとつ。外に行かなくて学内の先生に色々やっていただく。だから外に行かなくても学内で人的なつながりが保証されてるんだっていうんですよ。会いたいと思えば、自分の専攻じゃない先生であっても学芸カフェテリアで一緒になった先生であればその先生にいつでもアプローチできる環境にある。こんな環境を利用しないことはないという考えを持っているわけですね。

そして最後、大学での学問を実践へと結ぶ手立てを知るために来ているんだと彼等は語っていました。そこで、一人学生を連れて参りました。先程申し上げたカフェメイツとして活躍しています。それから参加学生と二つの点から中島美和から発表させていただきたいと思います。宜しくお願い致します。

東京学芸大学3年の中島美和と申します。宜しくお願いします。今までの3人の学生の事例と同様に私自身の調査結果をもとにお話しさせていただきます。私は2009年から学生スタッフとして学芸カフェテリアの取り組みに参加することになり、受講者として、またスタッフとして多くの講座に参加してきました。先程と同じ、1週間あたりの時間の過ごし方を表したグラフがありますが、4月の時点では将来の見通しを持っているが何をすべきかわからないという状態で、御覧の通り、学芸大生の特徴として授業時間は非常に多いのですが、自主的な勉強は、あんまりできていない状態です。授業とアルバイトと、かなり2極端の生活をしていました。それが7月の時点で意識が少し変わりまして、何をすべきかわかっているが実行できていないというふうになっています。まだまだ私の場合は発展途上で、顕著な結果が出ているとは言えないのですが、オレンジの部分の部分が少しだけ上がってきたということが見て頂けると思うのですが、3年生になって将来を見据えて今しなければいけないことを模索し始めた段階だと思っていただければと思います。

次に授業、授業外活動における体得感ですが、これも4月の時点と7月の時点で少し注目して頂きたいのは、授業で得られたと感じたことが少し上がっている。これは後からも少しお話しますが、3年生の授業が実践的になってきたというのもあるのですが、学芸カフェテリアの講座で得たものが

授業で学んだことへの意識に関連してきていて、4月から比べて授業でも得られたという体得感が少し上がってきているものです。ここで学芸カフェテリアの講座に出て私が感じていることなのですが、学芸カフェテリアの学びが大学の授業と自分自身の学びの橋渡しになっているということを凄く感じています。私がいち学生として授業に出ていることが自分にとってどんな学びになっているのかというのをメタ認知するような機会になっていると思っています。そのように考える理由が大きく2点あって、まずひとつは学芸カフェテリアの講座は大学の先生方がご自分の専門としていることやご自分の趣味の研究を結び付けた正規の授業とはまた違う面白い講座を沢山持っていて、カフェテリアの講座が教授と学生の橋渡しになっている。こんな先生なんだということを知ること、大学の正規の授業にも興味を持って取り組めるようになるのではないかと考えています。

もうひとつは、キャリア支援メニューという方の講座では、私が感じるキャリア支援メニューの共通点としては自分を客観的に見つめなおすことができる講座が多いなあという印象を持っています。自分では気づかないところを他者の視点を借りることで気づくことができる、それで学びが深まるということで、私が今何を学んでいるのかということを知ることに関わっていると思います。先程も言いましたが、私は学生スタッフとしてもカフェテリアの講座に関わってきました。最初は準備や簡単な司会をするお手伝いという意識だったのですが、今年度後期からはファシリテーターとしての役割も担わせていただくこととなります。そのために行われた2回の研修が私にとってとても大きな学びでした。その研修を受けて、今教員免許を取るための授業も沢山受けていますが、教師はファシリテーターそのものだなということを凄く感じて、そこからどんどんカフェテリアの講座が自分が普段大学で勉強していることとリンクすることが多くなって、大学の授業で私はこんなことを勉強しているんだということをおぼろげながらも意識するようになりました。これは、単に教員になりたいと思っている学生だけでなく、社会人になったときに人としての幅広い引き出しを造るための大きな学びになっていると思います。以上が私の調査の報告です。ありがとうございました。

このように、中島さんのような素晴らしい参謀を得ているわけです。片腕となってくれるカフェメイツを得ています。それで、カフェメイツたちと前期の反省を行いました。彼女たちから私も色々学ばせて頂きました。まずはカフェメイツが言いますには、その問いというものにファシリテートの誘導を感じすぎる、つまりあなたは明日からどのように行動変容しますかと聴くことも大事かもしれないけど、一方で熟成させる期間も大事なのではないかと。さすが教育学部の学生は違うなと勉強になりました。そこで、後期の改善点なんですね。やはり学びの掘り下げの程度を講座によって微調整しているということになりました。もちろん学習支援メニューというのは人間の幅を広げる講座ですから、個別の、先生の好きにやっていただくことを大切にしながら個人同士の感想をシェアする。そういうことにしよう、楽しみましょうということですね。ところがキャリア支援メニューに関してはディスカッションを導くために、最後まで20分だけディスカッションをするのではなくて、途中途中で問いかけを少しずつ出していきながら、最後ディスカッションに、クライマックスに繋げていくような仕掛けを入

れていく必要があるのではないかという話し合いをしました。そこで、後期から学生にファシリテーターをやってもらうのですが、担当の先生と綿密に打ち合わせをして授業を作っていこうという取り決めをしました。そして今度は後期、いよいよGP最終年度になります。今は文科省から予算を頂いていますので、これを生き金にしたいと考えているんですね。私共は、ですので、GPから予算頂いた後も恒久的に事業を継続できることを見据えて後期を考えています。2つ対策を考えています。

まずは理念を共有することです。やはり理念を持っていないと足元が揃いません。一つの理念というのを揃えるということで、教員も学生たちも足並みをそろえて学芸大ならではのキャリア教育をしていくことができるんじゃないか。そこに本学のアドミッションポリシーというものをあてることにしました。二つ目は、人的資源の連携です。まずアドミッションポリシー。本学は教育者の育成が、アドミッションポリシーなんですね。これは何も教員に限りません。教員に限らず社会に出たときに、社会やコミュニティ、小さな組織、集団でもいいんですが、その中でリーダーになる人。そういう人を育成するのが本学のアドミッションポリシーなんですね。それを支援する形で、学芸カフェテリアの講座を組み立てていきたいと思います。これを一つの主軸にして先生方に呼び掛けていけば、講座の理念として今後も残っていくのではないかと思います。後期はそれを実現していきたいと思っています。もうひとつは私たちファシリテーターが抜けても教職員と学生ファシリテーターが作り上げる講座にしていきたい。そのために後期は学生ファシリテーターを育てていきたいと考えています。学生が学びの落とし込みを有効に行うために、そのためにやはり先生方と入念な打ち合わせとファシリテーションのスキルアップ、それを考えてやっていきたいと思います。ありがとうございました。

質疑応答

質問者

「一橋大学の二宮と申します。大変興味深い取り組みで勉強になりました。伝統的に大学教員は講座制であるとか学科目制の元に、正課教育に縛られて自らの教育を考えていると思うのですが、ここで二つほど質問させていただきたく思います。一つは、これは恐らく根本的な質問なのですが、どうしてこの各種の講座を正課外と位置付けて行ったのかということが一つ。二つ目が実は私共も正課外教育のプログラムを幾つかやろうとするのですが、なかなか学生が集まらない。単位にならないから行かない、と言われてしまう。そこで、こうした正課外の講座に学生を参加させる工夫やアドバイスを頂けたらと思います」。

番田

「何故正課外か、ということは、このGPは学芸カフェテリアという名前がミソになってまして、カフェテリアでメニューを選ぶように学生が自主的に選ばせるということに動機付けがあると思うんですね。単位をあげてしまうとやはり強制感が出てしまうと思うんですね。そこで学生が自主的に選ぶということでメニュー化している。それがカフェテリアという形で提示していることで、学生の自主的を重ん

じさせて自分に最適なものを学生が自分で選ぶ、そういう能力を付けさせる。そういう目的を持っています。それから効果的な周知の仕方ということですが、実はNTT データと共同で Web サイトを構築しました。これは本当は既存のパッケージものだったのですが、そこに美術の先生や色々な先生方が関わってくださりましてデザインもオリジナルのものになりました。色々とお金も交渉しまして、様々な策を練りましてバラエティ性のある Web サイトを作りました。そこから学生がエントリーして講座に入っていくんですね。そこもデザインが面白いということと、それから美術科のスタッフにバナーを作らせています。美術科の学生がいますので 2 メートル四方の大きなポスターを作って掲示しています。学生の作品を出す場にもなっていますし、素晴らしい宣伝効果を生んでいると思います」。

質問者

「京都外国語大学の斎藤と申します。今の先程のカフェテリアで学生に選ばせるという点なのですが、そこで学生たちが自分で選ぶとなったら、例えばある学生は肉が好きだから肉ばかり選んでメタボ体質になるとか、そういうふうにはさせない工夫もしているのでしょうか」

番田

「全くしてないですね。それはさっきの話じゃないですが、出会いがあればいいんじゃないでしょうかね。そういう意味ではコントロールはしていません」。